

第 18 回緩和ケアチーム抄読会

平成 21 年 8 月 14 日

担当：藤澤 大介

Symptom indicator of severity of depression in cancer patients: A comparison of the DSM-IV criteria with alternative diagnostic criteria

Akechi T, et al. Gen Hosp Psychiatry 31, 225-232, 2009

【背景】

うつ病(大うつ病)の診断は、DSM-IV の診断基準(アメリカ精神医学会 .Diagnostic and Statistical Manual-IV) が世界的に普及しているが、がん患者においては、大きく 2 つの点で診断に問題があった；

DSM-IV の診断基準に身体症状が含まれる がんによる症状と区別が難しい
重症度判定が難しい

がん患者のうつ病に対して、抗うつ薬は重症うつ病にしか効果がないので、重症度判定は重要
しかし、重症度は症状の数と強さによって決定される。これもがんの病状に影響される

それを補うものとして、除外的診断 (Cavanaugh 基準) と代替的診断 (Endicott 基準) が提案されているが、その妥当性は十分に検証されていない。

身体疾患患者の大うつ病診断基準(案)

	DSM-IV	包括的診断	除外的診断 (Cavanaugh基準)	代替的診断 (Endicott基準)
共通部分	抑うつ気分、興味・喜びの消失、 精神運動緩慢 または 焦燥 自己無価値感、自殺思考			
オプション 部分	集中・決断困難	集中・決断困難	集中・決断困難	恐怖/抑うつ 的な表情・姿態
	食欲・体重の低下/増加	睡眠障害	できるはずなのに医療ケアに参加しない、医学的には改善しているのに機能の進展が見られない、身体状況に比して機能が低い	社会的引きこもり、会話↓
	易疲労感・意欲低下			くよくよ、自己憐憫、悲観 元気づけられない、笑わない、 いい話・面白い話に反応しない
コンセプト	身体疾患によると明確なものは除外する	身体疾患による可能性があっても包括する	身体症状は基準から外す	身体症状に関連する可能性がある場合は代替基準を採用する

【目的】

上記に配慮し、うつ病の診断基準をみなおす。特に、うつ病の重症度に影響する項目を検証する。

【方法】

1996-2003 年に国立がんセンター精神科に依頼されたうつ病患者 728 人のデータ-ベースを二次解析した。既存の 4 種類の診断基準 (Table 1: 別紙) の項目に対して、項目反応理論 item-response theory

(IRT) を用いて、うつ病の診断基準の比較検証をした。

【結果】

- ・DSM-IV の Optional な基準（食欲・体重、睡眠、易疲労感・意欲低下、集中困難）は、いずれも判別能力が低かった。
 - ・自己無価値感（DEP7）と自殺思考（DEP9）は、中等度の重症度の時に効力を発揮するが、判別能力は低かった。
 - ・自己無価値感（DEP7）と自殺思考（DEP9）以外は、うつ病重症度が軽い時には、判別能力が高かった。
 - ・身体状況に比して低い機能（Cavanaugh 基準）は、中等度の重症度の時に効力を発揮し、判別能力が高かった。
 - ・自己無価値感も自殺念慮も、重症度判定の判別能力は低かった。
 - ・身体状況に比して低い機能（Cavanaugh 基準）と、社会的引きこもり・会話の減少（Endicott 基準）は、中程度の重症度で高い判別能力を示した。
- これらの症状があれば、少なくとも中等症以上のうつ病である可能性が高い。

したがって、

がん患者におけるうつ病の重症度を評価する上で、以下の項目が推奨される

うつ病の重症度	推奨される評価項目
軽症	・恐怖・抑うつ表情・姿態（Endicott） ・くよくよ、自己憐憫、悲観（Endicott）
中等症	・医療ケアに参加しない、身体状況に比して機能が低い（Cavanaugh 基準） ・社会的ひきこもり、会話の減少（Endicott）
重症	・元気づけられない、笑わない、いい知らせやおかしいことに反応がない（Endicott）

注）「恐怖・抑うつ表情・姿態」 不安の併存が多いので、役に立ちにくいかもしれない

【結論】

がん患者のうつ病の評価においては、包括的診断で大うつ病の診断をつけ、重症度判定には上記の表の項目を参照するのがよい。

【コメント】

がん患者のうつ病を評価する際には、DSM-IV の診断基準のみにとらわれずに判断することが重要である。

特に、Cavanaugh 基準や Endicott 基準の診断項目は、看護師などのプライマリケアスタッフでも検出しやすく、また、臨床的な重症感とも近く、本研究は実臨床の感覚を裏付ける有意義な研究と考えられた。